

蒜山礼讃

蒜山高原の2年間の生活と訣別し、鶴山の桜花で親しまれる城下町津山での暮もはや10ヶ月を数える。

何時もながら過ぎ去った才月の足早きことをしみじみと思ひ才月人を待たずの古言が浮んでくる。

2度の夏と2回の冬を通じての蒜山の暮に、生まれ故郷に寄せる以上の慕情を覚え、時にふれ折につけて思わないではいられない当時の出来事、四囲の風情に懐しさ一入である。吠えるが如き吹雪の日々、雪原に映ゆる蒼穹、春の日ざしに日々とあらわれる黒土の魅力、新緑五月に萌ゆるワラビの野性的味覚、清涼な高原の夏、そこにくりひろげられる真白なキャンプ村、都会の香豊かな乙女の一行、全山瞬時に色どられる秋状の光景、とめどなく脳裡に走馬燈の如く画かれる。湯原ダムに湛えられた湖水の面にうつる遠き彼方の蒜山三座の容姿は湖上船が刻む波紋にゆれて絶景である。

過ぎ去ったいにしえは、その不浄なもの、みにくきものが時の流転に消えさり清拭されて懐しく美しい思い出となって追憶の情をかもすものである。

けれど、過ぎし日に住まいした土地がノスタルジックな感傷を呼ぶ奥底を尋ねると、そこには人知れず苦悩し歓喜した生活の戦が積重なっているものでなからうか。

生まれ故郷を離れて暮した土地が第二の故郷としてその人の生涯に連れそいノスタルジアをおこしめるのは、その土地の自然美もさりながら、生活の戦が深く起因するものであろう。蒜山がしばしば私の頭脳を占有するはまさしく地の人々と膝を交えて接触し得た生活の変化がもたらすものである。

この様な思いを抱いて久方ぶりに雪の蒜山路を訪れ、心ゆくまでその雰囲気に浴する機会をキサラギも残り少ない雪の晴れ上がった日に得た。

試験場という狭い社会で起床から就寝までの暮から解放され、行けど果しない広々とした蒜山の一角にたたずむとき、まさしく快哉、身のすみずみまで新鮮の気で洗われたが如き心地であった。

ジャージー牛導入の蒜山ブロックを形成する二川地区にAという部落がある。

乳牛の導入当初10頭ほどで始めた此の部落の酪農の足どりは健実そのもので、乞われるままに一夜を此の部落で送った。

二川は現在湯原町に合併されているが、村の酪農に対する力の入れ方は大変なもので村政が酪農という

レールの上を走っている感じである。さて此のA部落を訪れて驚いたことには、すばらしい公民館が建設されていたことである。各部落に出来ているようで、丁度此の日F部落では竣工式が催された様子であった。A部落では以前は専らKさんの離座敷で酪農家が集まり雑談をすることになっていた。公民館が出来てからはジャージーの会合はすべてこの施設を利用しているのだとKさんが聞かせてくれながら公民館に案内して頂いた。

館に一步を入ると仲々素晴らしく、村が相当額の出費を行ったのだそうである。

驚いたことには、ステージの幕に、ジャージー牛の顔を描きそのまわりを稲と樹木でふちどり発案者のSさんが此の村の営農は此の幕のマークが示すとおりであると大いに力説してその所以を説明して下さった。

ステージは畳が敷かれここで雑談会をやったのであるが、ステージの幕に酪農を象徴したジャージー牛の顔が染めぬかれてあったことは日本の何処にも見られないトピックニュースであろう。此の村の此の部落の方々の酪農に対する力の入れ方が異常なものである一端をしみじみと感じたわけである。

その昔、Kさんの離座敷でやっていた頃からであるが、此の部落の雑談会は夕刻から始めて翌朝午前2時頃まで続行することになっている。

公民館での此の度の雑談も正しく2時までであった。あれこれと駄べり尽して時計をみれば午前2時というわけで誰も意識して2時まで頑張っている様子もみられない。

全く熱心なこと他に類をみない。殆どどの雑談は酪農マンの集まりであるが今回は酪農ウーマンと混合の集いであった。聞けば此の回のすぐ前のウーマンの雑談会があり仲々盛況であったと中福田家畜保健衛生所のNさんがもらしていた。

夜更けて早朝2時頃までの雑談会に出席する御婦人達の張り切り方には全く敬服の至りで、くだらない話をしたり顔してシャベった自分につくづくあわれを覚えたのである。

一睡のあと、黄色に色どられたトヨペットの集乳車に便乗し珍らしく雪の少ない蒜山路をあとに別れを告げたのである。

(T.M)